東院地区西北部の調査

―第381次

1　はじめに

平城宮の東に張り出す東院地区では、1960年代以来、東院地区の西側と園池をとりまく南側を中心に発掘調査がすすめられてきた。とくに東院地区東南隅の園池部分については、2003年に『平城報告XV－東院庭園地区の調査』として調査成果を公刊し、こんにちその一帯は「東院庭園」として復原整備がなされている。

文献史料にあらわれる「東宮」、「東院」、「東内」あるいは東院を改造したと考えられる「楊梅宮」は、饗宴や叙位、儀式などがとりおこなわれた場所として、奈良時代後半になるとしばしば登場する。東院地区の発見以来、園池を中心とする南側と西側を中心に調査を進めてきたが、史料に登場するような儀礼等の舞台となった東院中枢部分の実態については、ほとんどわかっていないのが現状である。称徳天皇が瑠璃瓦を葺いたとする玉殿あるいは饗宴にもちいられた朝堂（『平城報告XIII』）などの建物が予想され、平城宮のなかでも解明が期待される地区であると言えよう。

今回の調査区は、大規模な総柱建物群を検出し、東院中枢部分の解明の嚆矢となった第292次（1998年度）の北側に設定した。調査は2005年１月５日から開始し、４月22日に終了した。調査面積は1050㎡。

2　周辺の調査成果

東院地区の東半分は北から宇奈多理神社にむかってのびる丘陵、西側は水上池からつづく谷地形であるため、今回の調査区がある東院地区西半部は全体的に東から西むかって下がる緩傾斜面にある。東西幅34～36ｍの調査区の東西で、遺構検出面は約１ｍの高低差がある（図100）。また、調査区の西辺から２～４ｍ東に約0.8ｍの段差があるが、下段にあたる西側の第128次調査（1980年度）で検出した遺構群の良好な残存状況からみて、この段差は奈良時代から存在したものと考えられる。

西側の第128次および第22次南（1964年度）の調査では、大きくわけて４期の遺構変遷が確認されている。とくに第128次では、平城宮造営当初の遺構は希薄であること、奈良時代前半もまだ整備がすすめられておらず、

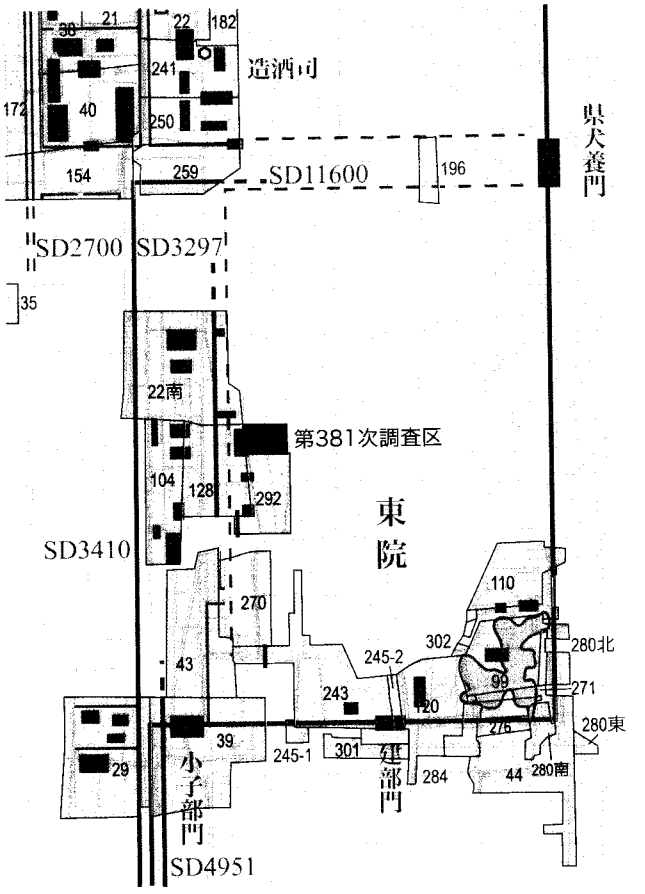

図99　第381次調査位置図　1:5000

後半になって大規模に整備され、大型の井戸SE9600など多くの建物が造られること、奈良時代末になって東院地区西面は築地で区画され、ますます拡充することなどが明らかにされた。このSE9600を中心とする建物群については、「東」「東家」などとともに「大膳」や「盛所」といった墨書土器が出土することから、東院に付属する雑舎や厨などの施設である可能性が指摘された。また、この調査で、東院地区の西限が各時期によって変更されたことも確認した。

第128次より一段高い東側でおこなわれた第292次調査では、奈良時代後半～末頃の南北に並立する大規模な掘立柱建物群SB17800、SB17810、SB17820が見つかった。SB17800とSB17810は総柱の構造で、高床の構造が考えられ、両者は軒廊でつながっている。この一連の建物群で、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿と類することから、「楼閣宮殿」であると考えられた。

今回の調査は、さらに北に展開すると予想された、これら掘立柱建物群の全容を把握し、西側の遺構群との関係を明らかにすることを目的とした。

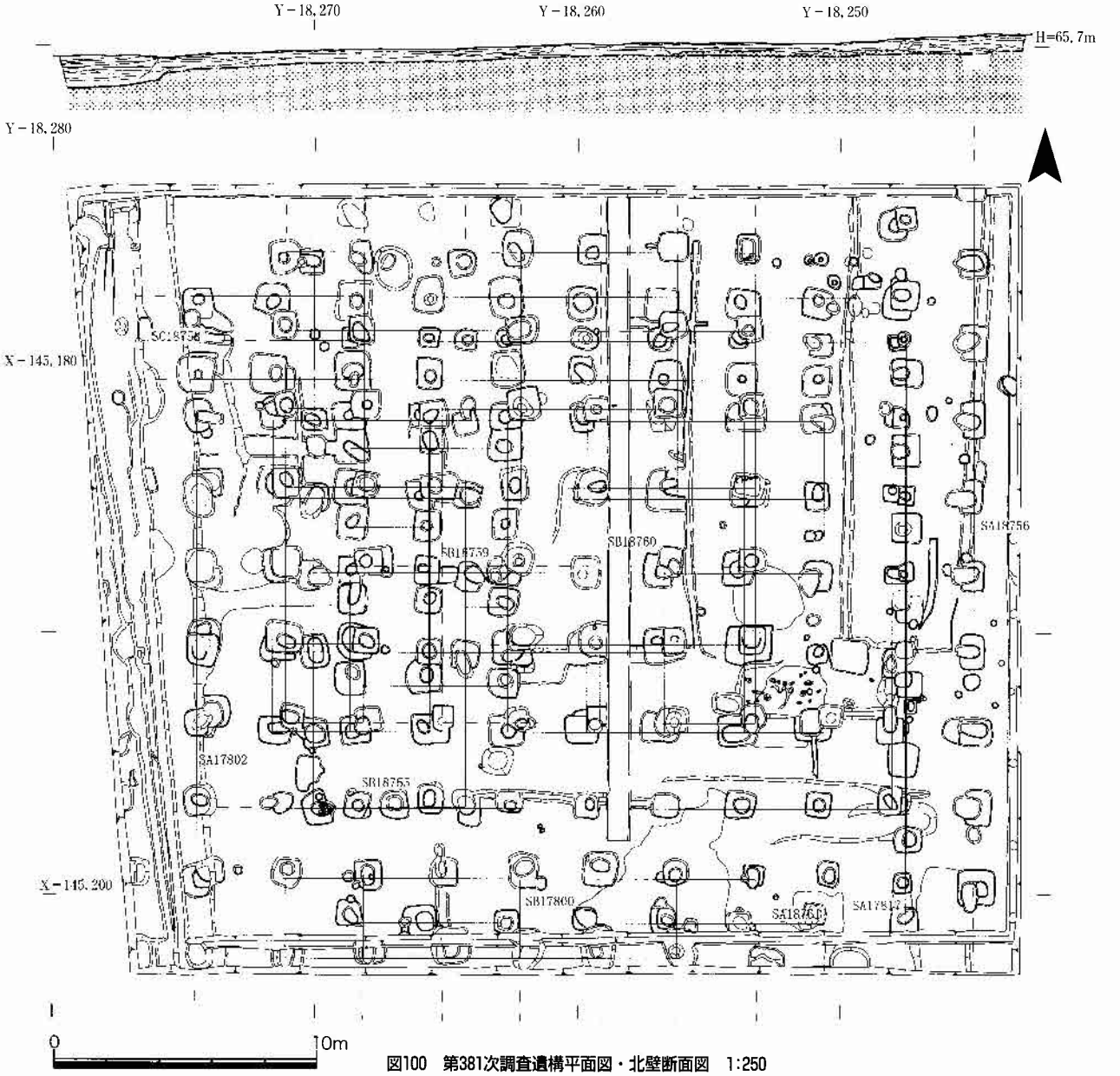

図100　第381次調査遺構平面図・北壁断面図　1:250

図101　SA18756とSA17817（北から）

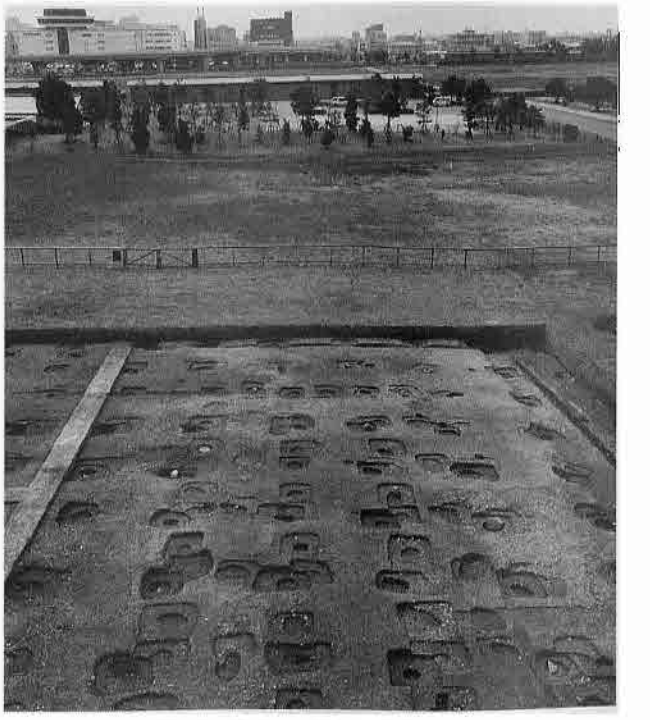

図102　SB18755とSA17802（北から）

3　基本層序

昭和30年代に作成された地形図によると、今回の調査区は3枚の水田区画にまたがる。東から西に階段状になった水田であったらしい。その後、史跡整備の工事によって、この段差は均された。基本層序は、整備による盛土が20～35cmほどあり、その下に旧耕土、さらに下が橙褐粘質土の地山となるが、西半は地山の上に中世以降の土器を含む遺物包含層が残る。奈良時代の遺構はいずれも地山面で検出した。地山は基本的に橙灰色の粘質土であり、東側は礫を含まないが、西にいくほど漸移的に大小の礫が多くなる。

遺構は重複関係から4期に大別できるが、検出面が同じであること、全体的に遺物の量が少ないことから、具体的な時期を特定することは難しい。とくに直接、他の遺構と重複関係をもたない遺構の場合、相対的な帰属時期を考定することすら困難である。ここでは周辺地区のこれまでの調査成果や柱筋の位置などから判断して、遺構群をA～Dの4期に区分した。

4　遺構変遷

A期

SA17802　調査区の西辺にある掘立柱の南北塀で、南の第270次調査区（1996年度）、第292次調査区から続き、本調査区の北端までは伸びない。これまでの調査では、奈良時代前半の南北塀と考えられており、その成果に基づいてA期に位置づけておく。柱掘形の底のレベルは63.8mと深く、東側の建物群の柱穴に比べて70～80cmほど低い（図104d）。現状では段差をまたぐように位置する（図100）が、本来、このSA17802は東側の高い段上の西縁にあったと考えられる。第292次調査でも検出した南端の柱穴には、径20cmほどの柱根が残る。

SB18755　梁行2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は10尺等間。桁行7間分を検出したが、北側の妻柱は確認できなかったため、さらに調査区の北側に伸びるとみられる。東側で確認した側柱の掘形は深さ60cmほど残るが（図104b）、南側の妻柱は比較的浅く35cmほどしかない（図104c）。北側の妻柱も浅かったのであれば削平された可能性も残る。検出できなかった柱穴が2基あるが、削平された可能性が高いと判断した。

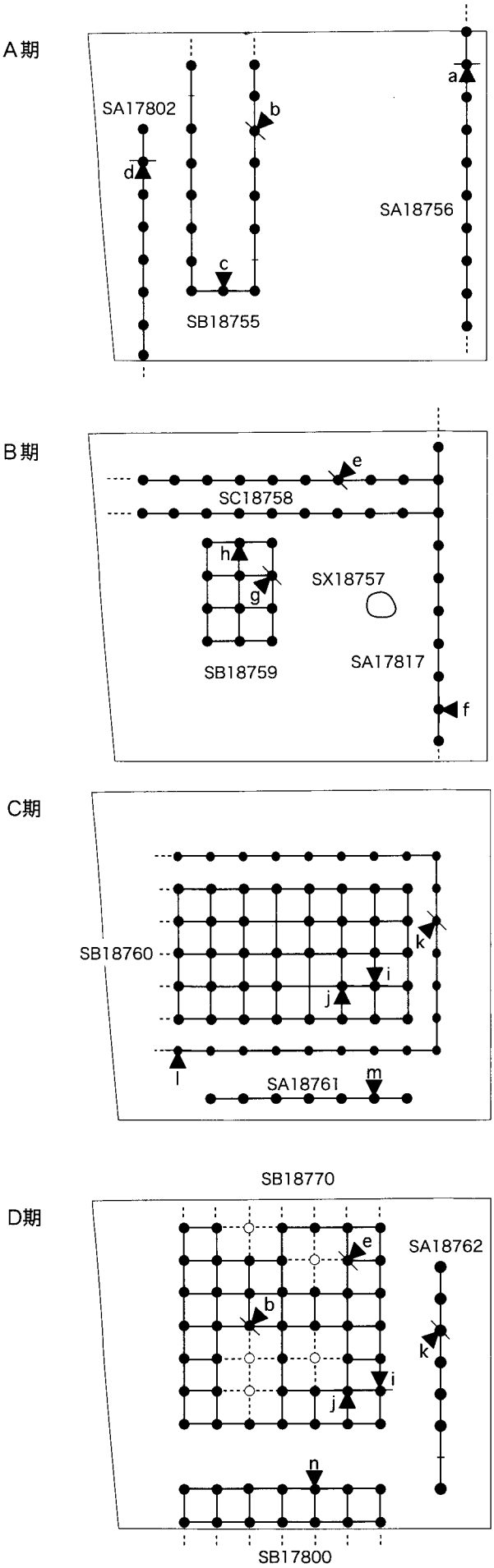

図103　遺構変遷図及び柱穴断面図位置図

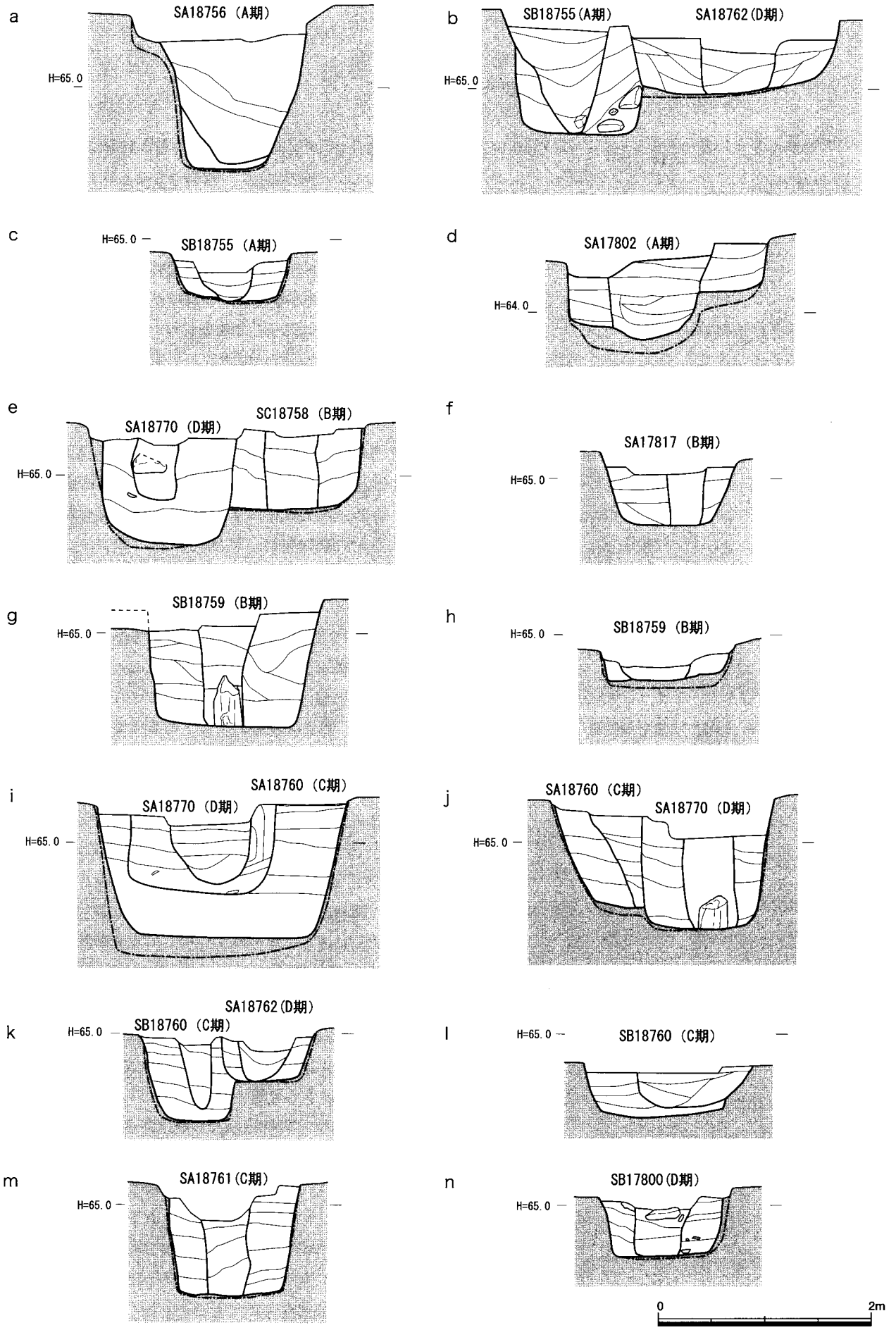

図104　各遺構柱穴断面図　1:50

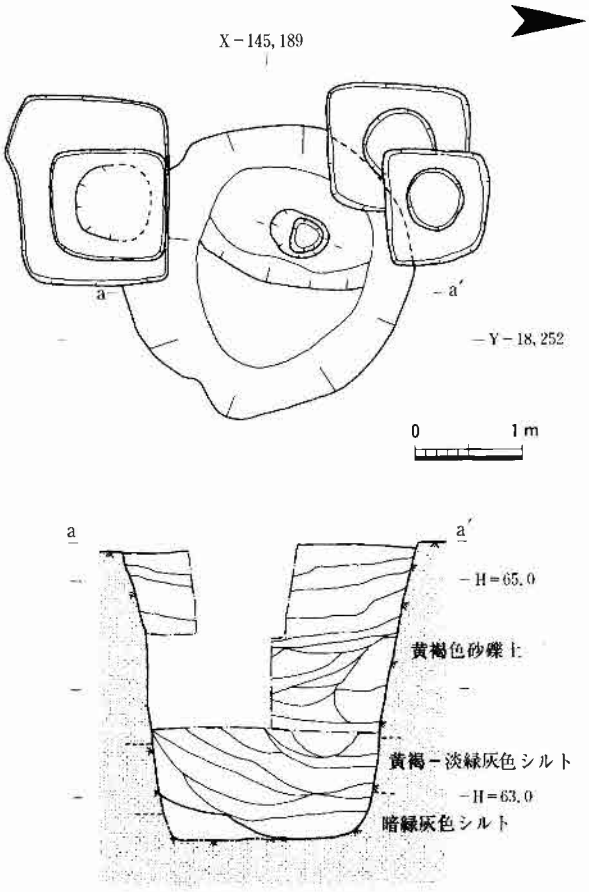

図105　SX18757平面図・断面図

図106　SA17802柱痕（西から）

SA18756　調査区東側を南北に走る10尺等間の掘立柱塀。これより東はさらに一段高くなる。第292次調査では建物の一部として理解されていたが、一連の塀であることが明らかになった。西側の南北棟SB18755と柱筋が合うことからA期としたが、重複関係や遺物などからは時期を確定できない。掘形は規格性が高く、約1.2mの深さをはかり、いずれも柱は西側に倒して抜き取られた痕跡を残す（図104a）。

B期

SA17817　SA18756の西2.5mの掘立柱南北塀。SA18756に比べると柱掘形はやや小さい（図104f）。柱間は10尺等間。第292次調査では奈良時代後半～末頃に位置づけられている。本調査区の北よりでSC18758と接続すると思われるが、南北塀自体はさらに北に伸びる。この柱穴が、C期のSB18760に伴う区画塀の柱穴に先行することから、B期に位置づけた。

SC18758　SA17817に取り付く単廊状遺構。桁行、梁行ともに柱間寸法は10尺等間。西側の第128次調査区ではみつかっていない。柱掘形の底のレベルが64.8m付近（図104e）、調査区西側の段差下のレベルが64.4～64.5mであることを考慮すると、調査区の西端で南北塀に取り付いていたものの、柱穴が完全に削平された可能性もある。重複関係からD期のSB18770に先行する。C期の18760とは直接の重複関係はない。

SB18759　南北3間、東西2間の総柱建物。柱間は10尺等間。側柱は深さが80～90cmあるが（図104g）、棟通りの柱は20～30cmほどと浅い（図104h）。南北の柱筋が合うためSC18758と併存するとみるが、両者の間は2.5mで10尺に満たない。重複関係からC期のSB18760よりも古い。

SX18757　直径約2.5mの円形土坑（図105、巻頭図版5）。SB18760とSB18770に先行しているため、B期としたが、A期以前に属する可能性もある。掘形の壁面は垂直に近く、土坑自体の深さは約2.7mをはかる。平坦な底面に径30cm、深さ40cmほどの小穴がある。周辺の地下水位は高く、近くの柱穴などでは1m弱で湧水をみるが、この土坑は水脈をはずれているらしく、水が湧いてこない。掘削の途中で放棄された井戸の掘形である可能性も考えられるが、こういった円形有段の構造は、都祁などで確認されている氷室遺構に似ており、なんらかの貯蔵施設であった可能性もある（参考文献：中山晋1999「古代日本の「氷

室」の実体－栃木県下の例を中心として」『立正史学』第79、川村和正2005「都祁氷室に関する一考察」『龍谷大学考古学論集』Ⅰ)。

C期

SB18760　東西7間以上、南北4間の掘立柱の総柱建物。建物の内部に当たる位置に柱穴の痕跡が見つからなかったものが2基あるが、D期のSB18770との重なり具合からみて、完全に重複して痕跡が失われたと判断し、総柱建物と考えた。柱掘形は1.0～1.8mと比較的大きい隅丸方形で、柱穴の深さは0.8～1.0mと斉一性をもつ(図104i・j)。掘形、抜取穴とも遺物は少量しか含まない。柱筋を合わせて周囲にひとまわり小さい柱穴がまわることを北、東、南面で確認したが、掘形の深度からみて(図104k、l)、おそらく西面は削平されたのであろう。ここでは区画塀と考えたが、庇になる可能性もある。

SA18761　SB18760の南4.5mで検出した掘立柱東西塀。柱間寸法は10尺等間。SB17800の掘形に先行すること、東西方向の柱筋がSB18760と合い、SB18760との間隔が15尺であることからC期に位置づけた。掘形は小規模で、やや不揃いである。

D期

SB17800　第292次調査で検出したSB17800が北に2間分伸びることがわかった。第292次調査では一連の総柱建物を前殿SB17810、主殿SB17800、後殿SB17830からなる宮殿遺構と考え、SB17800の東西両側にとりつく階段の柱穴の位置から、SB17800を東西6間、南北4間とし、北側の柱列は後殿SB17830の一部と考えた。今回の調査によって、北にもう1間分を検出し、その北側に同規模かそれ以上の規模のSB18770を検出したことから、SB17800は北に2間伸び、東西、南北とも6間四方で、平面が正方形の掘立柱の総柱建物になることがわかった。柱間は10尺等間。

SB18770　SB17800の北側柱から東西約6m(20尺)隔てた掘立柱建物。東西は6間、南北は6間以上。総柱建物と考えたが、ところどころに柱穴を検出できない箇所がある(図103中「○」で記した柱穴)。柱掘形は0.8～1.2mとやや小型で、深さも0.4～1mと斎一性に欠く(図104b・e・j・k)ため、浅い柱穴で削平された可能性も否定できない。北側の東から3つ目の位置は他の遺構との重複がない場所であるが、柱穴を検出できなかった。建物の北辺となる柱掘形が浅い可能性は低いと考えるならば、この建物はさらに北側に展開するとも考えられる。ところどころ柱穴が削平された総柱であるのか、もともと柱がない特殊な構造の建物であるのかは、現段階では判断できない。

また、この建物の柱掘形と抜取穴は、瓦や土師器甕などの遺物を含むものが多い。柱根が残るものもあり、抜取穴に人頭大の石が投げ込まれているものも目立つ。

SB18762　SB18770から約6m(20尺)東側に検出した掘立柱南北塀。柱掘形は小さく不整形で浅い(図104k)。柱間寸法は10尺等間。7間分で南北には続かない。SB18770の東側の柱とほぼ柱筋が揃う。重複関係からSB18760よりも新しい。

奈良時代以前の遺構

SX18763・SX18764・SX18765　埋土および周辺の包含層から出土した土師器からみて、古墳時代前期の竪穴住居とみられる。いずれも削平されているため、暗褐色の埋土が薄くしか残っていない。SX18763からは布留式期の土師器が出土した。

5　出土遺物

土器・土製品、瓦磚類、木製品が出土した。木製品としては、SX18757から籌木1点が出土している。

土器・土製品

古墳時代から近世の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器など土器・土製品がコンテナ4箱ほど出土した。包含層出土のものが多く、遺構に伴うものはいずれも小片である。　**(神野　恵)**

埴輪　図109は調査区西南、SB17800の西北付近の包含層よりまとまって出土した埴輪片から復原した朝顔形鰭付円筒埴輪である。胴部下半を欠損している。硬質に焼き上がり、口縁部が大きく焼け歪んでいる。鰭付で、肩部直下に突帯を2条近接して回し、胴部各段に三角、四角、円形の各種透孔を規則的に穿つ方式は、5世紀中頃のウワナベ古墳で使用された円筒埴輪に見られる特色である。これまでウワナベ古墳では朝顔形で円筒胴部との関係がわかる報告例はなかったため本製品は貴重である。ウワナベ古墳に樹立してあったものを上半のみ折り取ってもってきて、出土地近くで埴輪棺として再利用したものだろう。残存高約70cm。　**(高橋克壽)**

表18　第381次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6131	A	1	6671	Ia	1
6133	Aa	1	6685	B	1
6244	A	1	6721	C	1
6282	G	1		Ga	1
6284	Eb	1		Hc	1
6304	?	2		?	1
6311	A	3		A	2
6313	A	2	6760	B	1
巴（室町）		1	西大寺345	A	1
中世軒丸		1	江戸		1
型式不明		6			
軒丸瓦計		20	軒平瓦計		11

	丸瓦	平瓦	磚他	凝灰岩
重量	78.0kg	258.4kg	14.8kg	1.4kg
点数	660	2422	10	7

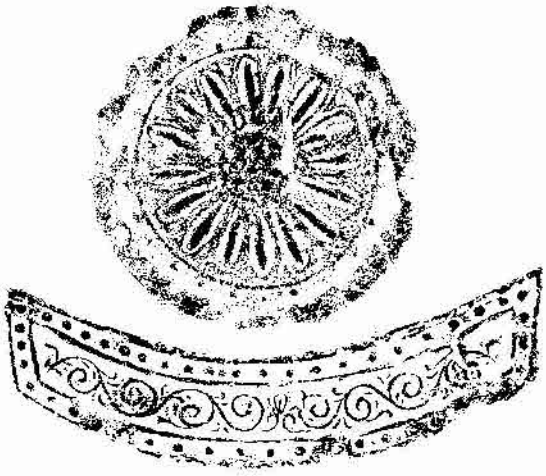

図107　SB17800出土軒瓦

図108　SB17800柱掘形軒平瓦6760B出土状況（南西から）

瓦磚類

本調査区からは平城瓦編年Ⅰ期からⅣ期までの瓦のほかに、中世、近世の瓦が少量出土した（表18）。奈良時代の瓦のうち、掘立柱建物の柱穴掘形および柱抜取穴からは計19点の瓦が出土している。主要な建物とかかわる瓦を以下に示す。

SB18760の柱抜取穴からは、平城瓦編年Ⅱ－1期軒丸瓦6311Aa、6313A、Ⅱ－2期軒平瓦6721Ga、Ⅲ－1期軒丸瓦6282Gが出土している。SB17800の柱穴掘形からはⅡ－1期軒丸瓦6311Aa、Ⅲ－1期軒丸瓦6131A、Ⅳ－1期軒平瓦6732A、Ⅳ－2期軒平瓦6760Bが、柱抜取穴からはⅡ－1期軒丸瓦6313A、Ⅱ－1期軒平瓦6685B、Ⅱ－2期軒平瓦6721C、Ⅳ－1期軒丸瓦6133Aa、Ⅳ－1期軒平瓦6732Aが出土している（図107・108）。とくに、SB17800柱穴掘形からⅣ－2期の瓦が出土していることから、この建物の造営時期は神護景雲年間以降である可能性が高い。

本調査区の軒瓦出土数は計31点で、100㎡あたりの平

図109　埴輪

均出土量を算出すると、3.0点となる。これは総瓦葺きの建物である第一次、第二次大極殿院、東区朝堂院の8.6～12.0点に比べ、低い数値といえよう（「左京二条二坊十一・十二坪の調査－第279次」『年報1997－Ⅲ』）。

同様に、100㎡あたりの丸瓦出土量の平均は7.0kg、平瓦は25.0kgである。近年の平城宮内の発掘調査と比較すると、第一次大極殿院西楼では丸瓦45.4kg、平瓦161.7kg、朝集殿院南門では丸瓦40.3kg、平瓦100.0kgが出土しており、これらは総瓦葺きの建物と考えられる。これに対して、本調査区内は8割方が建物遺構で占められ、4期にわたって建物が建て替えられている場所としては、瓦の出土量がきわめて少ない。この状況からすると、今回検出した掘立柱建物は総瓦葺きではなく、甍棟檜皮葺か全面檜皮葺きのような屋根であったことを考慮する必要があろう。

（今井晃樹）

6　まとめ

東院地区西辺部の建物遺構の特徴と性格

東院地区西辺部における遺構の第一の特徴は、掘立柱建物が広範囲にわたり高い密度で存在することである。とくに今回の調査区で検出した建物は、すべて10尺等間の柱間寸法で設定されており、各期を通じて一貫した高い計画性のあったことを示している。また東院地区西半部の緩傾斜地に造成された幅40m足らずのこの一帯は、東側の最も高くなる東院中枢部分推定地と、西側の本来、低湿地であった一段低くなった地帯との間にあって、奈良時代を通じてほぼ同じ東西規模の区画として建物群の建て替えが繰り返されたことが知られる。

なかでもA期を除く3時期には、建物はいずれも総柱の構造をとり、とりわけC期、D期には、平城宮内でも最大級の総柱掘立柱建物が造営されている。なお、D期のSB18762については総柱建物ではなく、さらに北側にのびる可能性があるが、その考察は北側の調査時にゆだね、ここではSB17800と同じ6間×6間の総柱建物と仮定して考察する。

宮殿区画の可能性

第292次調査では、D期の総柱建物を、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿（西宮正殿）との類似性などから、饗宴を挙行する区画の中心施設「楼閣宮殿」に推定した。饗宴施設としての宮殿建築は唐・大明宮の麟徳殿や李氏朝鮮の景福宮慶会楼などに類例を求めることができ、総柱建物である点や宮殿中枢部の西側に位置する点で共通している。

しかし、今回の調査によって、D期の総柱建物群は6間×2間の総柱東西棟1棟と、2棟の6間×6間の総柱建物が同じ中軸線上で南北に並ぶことがわかり、宮殿としては特異な平面構造をとることが判明した。また、C期の東西7間、南北4間の東西棟総柱建物は周囲に目かくし塀的な区画施設を伴う可能性がある。さらに、B期の小規模な総柱建物は宮殿に直接関わる建物とは見なしがたいことなどを考えると、この一画の遺構群の事実関係から宮殿であることを推定するには、やや厳しい状況である。

倉庫区画の可能性

一般に総柱建物は校倉に代表される高床式の倉であることが多く、ここでも倉庫区画である可能性を考慮しておく必要がある。すでに指摘したように、東院区画西辺部の低地の一帯に厨や雑舎が立ち並ぶ状況が確認されていることから、そこに隣接する、やや高台となった今回の調査区周辺の一帯が西辺部とともに東院のバックヤードを構成する倉庫区画であった可能性も十分に考えられる。第128次調査区では、SB17800のすぐ西側の土坑SK9608から「蔵」あるいは「蔵人所」といった墨書土器が4点出土していること、唐長安城では東宮の西南よりに「左蔵庫」を配していることなどを考え合わせても、東院地区のいずこかに倉庫があった可能性はあろう。

本調査のD期の状況は、規模こそ異なるものの、前期難波宮の内裏西方地区や地方官衙遺跡で確認されている、総柱倉庫群が整然と並列している状況と通じるともみられる。

ただし、D期のSB18770の平面構造は、必ずしも総柱建物とは言い難い、きわめて特異な様相をみせている。廃絶後の削平作用によるものか、本来の状況であるのか、今回の調査だけでは解答を見いだすことができなかったが、いずれにしても、従来の平城宮内での建物の常識を超えた存在であることはまちがいない。今後隣接地を含めて、さらに東方に想定される東院宮殿中枢部分について、発掘調査による解明を推進することにより、この地区の性格をいっそう鮮明にすることが期待される。

（井上和人・金井　健・神野）